

アスリートファーストこそ

記者の目

旧国立競技場が「サッカーの聖地」と呼ばれたのは、選手がプレーをしやすい、世界に誇る芝だったという側面がある。

芝生を管理するある業者は「もちろんグラウンドキーパーの手入れは素晴らしいが、国立競技場は日当たりや風通しがよかった。芝の育成に適

していた」と説明する。

ある陸上の現役選手は願う。「立派、イコルいい競技場ではない。簡素でいい。

せっかく造るなら、選手が競技しやすく、観客からも愛される国立であってほしい」。

選手が求めるのはコストがかかる奇抜なデザインの競技場ではなく、あくまで機能性。不備のない走りやすいトラックであり、練習場から招集場所、スタート地点へスムーズ

に行けるかなど、競技に集中できる構造だ。

新国立競技場の着工にゴーサインが出た。屋根が開閉式となり、芝の管理は？ サブトラックは仮設なのか？ 選手の動線は？ これから具体的な中身が問われてくる。

難工事でコストを押し上げた二本の巨大アーチ。基本設計時から約900億円膨らみ、総工費は2520億円になった。今後さらに増える可

能性もある。だからといって、トラックやフィールドのコストが削られ、選手にとって必要な通路や控室の構造にしわ寄せがきてはならない。外観費用のために、選手が犠牲になるとしたら本末転倒もはなはだしい。

競技場は選手のために。建築家のためでも、政治家のためでもない。アスリートファースト(選手第一)を忘れな

いでほしい。
(森合正範)